

# 高校魅力化における「地域の特色を生かした教育」のあり方を考える

—学習目標と学習効果の整合性に着目して—

樋田 有一郎

## 1. 生徒目線の成果指標

2011年度に鳥根県で、「地域の特色を生かした教育」を核とする高校魅力化事業がスタートし、高校魅力化改革はまたたく間に全国に広まった(樋田・樋田2018)。また、この間に、政府・文科省は、社会に開かれた教育課程、カリキュラム・マネジメント、学校地域連携などを唱えるようになった。こうした政策は高校魅力化と強い関連性を持ちながら進められている。

高校魅力化の目的と方法は多様である。現時点では後述するように、①政府・文科省の高校教育改革、②「チーム学校」、③離島・中山間地域の統廃合回避、④高校の地域貢献の4つの改革の潮流があり、4つの潮流が合流して混乱している。この混乱は、次の意味で動乱と呼ぶのがふさわしいかもしれない。高校教育は学歴主義的な価値観や中央集権的な価値に方向付けられた目的や方法が大きく変わろうとする動乱期にあるという意味である。この状況を文科省の『高等学校学習指導要領の改訂のポイント』は「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視」と述べ、鳥根県(2019)の『県立高校魅力化ビジョン』は「豊かな自然、歴史・伝統、文化といった地域それぞれの魅力や教育資源(ひと・もの・こと)を生かす、地域社会に開かれた高校づくりです。」と述べている。

魅力化の取り組みは高校教育の動乱期の申し子である。今、高校魅力化では目的と成果指標の開発が重要な課題となっているが、従来から用いられる自律性、主体性や大学進学実績といった目的や成果指標では、進行しつつある学校地域協働による地域主義的な人材育成を十分に捉えることは出来ない。実際に行われる教育実践の中身を学習効果の観点から検討する必要が生じている。

そこで、本稿では、4つの潮流の目的・方法から演繹して高校が何を生徒の学習目標と設定するのかを検討するのみではなく、生徒が実際に地域の特色を生かした教育で学んでいることや、地域と向かい合う中で成長・変容している“学習効果”の内容を実際の生徒対象のインタビューデータをM-GTAの手法を借りて帰納的に析出する。

このことは、何を学ばせたいかではなく、何を学んでいるかを検討することを意味する。何を学んでいるかを検討することで、4つの潮流から演繹される学習目的と生徒の実際の学習効果の整合性や

齟齬を考察することが本稿の目的である。

## 2. 地域の特色を生かした教育に至る4つの潮流

高校魅力化を自称する高校は全国募集、寮、学校連携型公設塾と並んで、地域の特色を生かした教育を取り組みの柱とする傾向が見られる。

地域の特色を生かした教育は大きくは4つの潮流の影響を受けている。政府・文科省の高校教育改革の潮流、「チーム学校」の潮流、離島・中山間地域の統廃合回避の潮流、高校の地域貢献の各潮流である。4つの潮流はそれぞれが別の源流を持つが、現段階での実践を見ると合流して1つの大きなうねりとなっている潮流でもある。

第1の潮流である政府・文科省の高校改革の潮流では、地域は教科（社会に開かれた教育課程）あるいは高校全体が核となって働きかける対象とされる。「地域との協働による高等学校改革の推進について（通知）」（文部科学省平成30年8月20日）を参考に、時系列を追って政府・文科省の最近の高等学校改革政策の動向を見てみよう。

まず、2017年3月に、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」及び「社会教育法」が改正された。その中で、①地域と学校の連携・協働の推進に向け、学校運営協議会設置が努力義務化され、②地域全体で子供たちの成長を支え、地域を創生する地域学校協働活動の推進について規定され、③社会教育関係者をはじめ地域の多様な主体と学校が連携・協働し、④高校生が地域課題を解決する取り組みを地域の住民や団体等と共に企画・実施することは生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に大きな意義を持つものであると謳われた。そして、⑤地域への愛着や地域の将来を担う当事者としての意識の向上など、地域の持続的な発展にも資することが期待され、地方創生や地域活性化への意義が強調された。

つづいて2018年6月15日に、高等学校改革に関する2つの閣議決定がなされた。1つめは「経済財政運営と改革の基本方針2018」（平成30年6月15日閣議決定）であり、「地域振興の核としての高等学校の機能強化を進める」こと等が重要課題への取組として位置づけられた。2つめは「まち・ひと・しごと創生基本方針2018」（平成30年6月15日閣議決定）であり、高等学校が、地元市町村・企業等と連携しながら高校生に地域課題の解決等を通じた探究的な学びを提供する取組を推進すること等が明記された。後者の「まち・ひと・しごと創生」は、首都圏への人口集中（東京一極集中）を是正し、地域におけるワーク・ライフ・バランスを確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していくことを主要な目的の1つにしている。2つの閣議決定に共通するのは高校を地域創生や活性化のエンジンとするという位置づけである。

最後に、2018年3月30日に「新高等学校学習指導要領」が公示され、そこには「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視するとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、各学校におけるカリキュラム・マネジメン

トの確立等に取り組むべき……」と書かれている。文科省は「社会に開かれた教育課程」の重視とそ  
の方法としてのカリキュラム・マネジメントの取り組みの促進を求めているといえる。

以上、政府・文科省は矢継ぎ早に、社会教育、経済財政運営と地方創生・地域活性化、学習指導要  
領のそれぞれの立場から、地域と学校との協働を唱えている。本稿の視点から整理すると、政府・  
文科省は地域を新しい高校教育の資源として、あるいは地域活性化の核として位置づけていると言  
える。

第2の潮流は、チーム学校論の潮流である。チーム学校論では地域の専門家が教師のパートナーと  
して位置づけられている。チーム学校論を3つの段階に捉えて整理したのが大橋（2017）である。

第一の段階は、1990年代以降の「教職員の多様化」論としてのチーム学校論の段階である。1990  
年代からの生徒のニーズが多様化した。チーム学校は多様化に 대응しようとしたものであり、とりわけ  
特別支援他の様々なニーズの子どもや、様々な考え方の保護者が増加している状況に対応して、教諭、  
養護教諭、学校栄養職員、事務職員が相互に協力しつつ、学校外の専門家と連携して課題に対応しよ  
うとした。

続いて2010年代以降の「学校のプラットフォーム化」論としての「チーム学校」論の段階である。  
学校を起点としつつ、学校の内外の職員、専門家と協力して問題の解決に当たろうという「学校のプ  
ラットフォーム化」の発想は「チーム学校」論の発想と大きく重なる。「学校のプラットフォーム化」  
論のもとで、子どもの貧困対策が進むが、スクール・ソーシャルワーカーの力を借りつつ、学校の内  
外の人材、機関とつなぐことの重要性が意識されていった。

最後に近年の「開かれた学校」論としてのチーム学校論の段階である。①よりよい学校づくりを通  
じたよりよい社会づくり、②新しい社会の形成者として必要とされる資質・能力の育成、③地域の人  
的・物的資源の活用、の3つの観点からのチーム学校である。

第3の潮流は統廃合回避のための高校教育の魅力化であり、それを実現するための主要な方法が地  
域の特色を生かした教育である。

1990年には4177校あった公立高校（全日制と定時制）が2018年には3559校となった。618校の  
減少であり、地方郡部での統廃合が多いことが想像される（『平成30年度学校基本調査』）。また、読  
売新聞社の独自調査によると、公立全日制高校の4割が定員割れしており、郡部や工業系、農業系の  
高校などが目立つという（2018年11月4日朝刊）。樋田大二郎（2019）は、地方郡部の高校の中には、  
“条件不利高校”が廃校になることへのあきらめが芽生えがちであるとしつつ、諦めない高校もある  
とする。樋田は諦めない高校は、地方郡部には「人交」が多いこと、地域ぐるみで高校生を支えるこ  
と、小さい学校だから生徒が大切にされ、役割があること、生徒に多様性があること、地域社会に開  
かれた学校であることなどの“条件有利”があることに気づき、それらを活用する地域の特色を生か  
した魅力的な教育を始めたとする。豊かな地域資源を活用する地域の特色を生かした教育は生徒に

とって魅力がある高校生活であり、進路形成や将来の生き方にとっても意義があると感じられる。遠回りのようであるが地域の特色を生かした教育は授業料減免などと比べて、生徒募集に効果があり、統廃合の危機回避に貢献している。

第4の潮流は地域活性化のエンジンとしての地域の特色を生かした教育である。上述のように地域の特色を生かした教育は、魅力化による統廃合回避の有効な方法として、今では少なくない離島・中山間地域の高校が実施している。しかし、それは、地元町村の活性化にとっても重要な意義を持っている。樋田有一郎（2014）は島根県立横田高等学校の事例から地域の特色を生かした教育が町の活性化に対して持つ意義を次のように検討している。

近年、新しい文脈で高校が議論されるようになった。……近年の地域への関心の高まりの中で、新たに「地域活性化と高校活性化」の議論が浮上した。全国総合開発計画（「全総」）を例にとると、同計画は今世紀に入り、国中心、開発中心の計画との違いを打ち出し「二一世紀の国土のグランドデザイン—地域の自立の促進と美しい国土の創造—」と名称を変えて、少子高齢化、グローバル化、六次産業化、一極集中から多軸化、地域の自立、といった新しいテーマで国土の問題を論じている。この動向の中で、地方の高校は新しい国土作りを推進する重要な使命を果たそうとしている。横田高校の取組はこの変化の中に位置づけた時、先進性と有効性と普及性を持っている。この意味では、地方の高校の活性化への支援は、日本社会全体の活性化の最前線への支援となる。（樋田有一郎 2014）

統廃合回避によって若者とその家族の転住を減らすことができる。また、高校があることでIターン者呼び込みやすくなる。こうした意味で高校は地域存続の生命線である。しかしそれだけでなく、地域資源の活用や地域住民を巻き込んだ授業によって地域が元気になる。高校は地域活性化の最前線でもある。後者については「まち・ひと・しごと創生基本方針 2018」の潮流と合流している。

以上、「地域の特色を生かした教育」は、政府や文科省あるいはチーム学校論にとっては、地域を新しい高校教育の資源として位置づけたり、あるいは地域活性化の核として位置づけたりしている。これらの位置づけは「社会に開かれた教育課程」や「開かれた学校」の考え方に帰結している。他方、地域レベルでは、地域の特色を生かした教育がもたらす高校の魅力度の増加によって統廃合回避効果が期待され、また、地域資源の活用や地域住民を巻き込んだ授業による地域活性化が期待されている。高校魅力化は地域存続の生命線であり地域活性化の最前線でもある。

ここまでで、地域の特色を生かした教育をめぐる政策的、社会的文脈から学習目的を整理した。次章では、生徒の実際の学習効果を検討するため、生徒対象のデータを M-GTA の手法を借りて分析する。

### 3. M-GTA による分析

本稿では、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて、高校魅力化をおこなう高校が取り組む地域の特色を生かした教育の学習効果を検討する。

M-GTAの産みの親である木下康仁によると、グラウンデッド・セオリー・アプローチには以下の特徴があるという。データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法である。そして、分析においては、①オープン・コーディング、②(軸足・) 選択的コーディング、③基軸となる継続的比較分析、④その機能面である理論的サンプリング、⑤分析の終了を判断する基準としての理論的飽和化の5点が不可欠の条件であり、「これらが適切に行われていれば、グラウンデッド・セオリー・アプローチに則っていると判断できる……」(木下 2003:35-36)としている。

本研究がM-GTAを用いる理由は対象者に寄り添った概念の生成に適しているからである。木下(2007)はM-GTAの重要なポイントとしてアブダクション(着想, 発想, ひらめき)をあげる。

解釈とは意味を読み取ることで、簡単にできる作業ではそもそもありません。……そのダイナミズムをうまく表現したのがアブダクション(abduction)という言葉で、……帰納的な方法(induction)や演繹的な方法(deduction)と違って、アイデアが自分の中で着想される、発想されることを指していて、ひらめきと言ってもよいでしょう。(木下 2007:3)

本研究は現場に足繁く通った教育社会学者として培った着想, 発想, ひらめきを動員しながら、結果から原因を推論するというアブダクション(仮説推論)を行う方法としてM-GTAの手順を用いる。

なお、M-GTAを教育研究に用いる利点について、奥貫(2015)は課題解決型学習の学習効果を分析するにあたってM-GTAを用いて、その理由を分析焦点者=学習者の視点から学習成果を分析する上で適当であること、定量的調査と比べて、分析対象とするデータを限定的に確定した上で分析が成立すること、課題解決型学習は学生たちが常に社会的相互関係のもと進行する過程であり、研究対象とする現象が文脈に影響を受けながら、かつプロセス的性格をもっていることから、M-GTAによる分析が向いているとしている。

本研究はまさに、学習者の視点から生徒の実際の学習効果を捉えるものであり、分析対象とするデータを限定的に確定しており、現象が文脈に影響を受けながら、かつプロセス的性格をもっている。M-GTAの採用により本研究の使命が効果的に達成できると考えられる。

※なお、本研究では、M-GTA分析の結果を早稲田大学大学院教育学研究科の院生達と検討している。

### 4. 調査概要

- (1) 研究対象校と調査員：愛媛県立三崎高等学校(「三崎高校魅力化プロジェクト」)、愛媛県立今治北高等学校大三島分校(「大三島魅力化プロジェクト」)であり、愛媛県郡部の魅力化を行う小規



模校2校。訪問聞き取り調査を行った。調査員は筆者と地域人材育成研究会のメンバー1名の合計2名である。

- (2) 聞き取り対象：校長、魅力化（地域との協働）プログラム担当教員、地域の協働者（各校2名）と行政の協働者（各校1名）、生徒（各校4名。本稿で扱うデータ。約2時間の集団面接）。
- (3) 生徒対象インタビュー実施日と会場：三崎高校は2019年6月24日放課後、図書室。大三島分校は2019年6月27日放課後、校長室。
- (4) インタビュー項目：半構造化されており、あらかじめ大きく、活動のやりがい、自分が活動に参加して得たと思うこと、地域についての思い、将来の地域との関わりかた、その他の5項目を用意した。
- (5) 本稿の分析は、おもに活動のやりがい、自分が活動に参加して得たと思うことについての語りを対象としている。それ以外については稿を改めて報告する予定である。

## 5. 分析

M-GTAによる分析の結果、以下の5つのカテゴリと9つの概念が生成された。

### ○カテゴリ A 「事前の関心」

カテゴリ A は入学前の今の高校への関心についてであり、「関心無し」と「関心有り」の2つの

表1 カテゴリ A 事前の関心

概念1	関心無し
定義	入学する高校の統廃合の危機や高校魅力化の取り組みに関心を払わない。
バリエーション	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) ここに来ることが進路のためだったので、あまり興味がありませんでした。参加をしていくうちに、とても楽しくて面白かったです。普通の高校生活では味わえないようないろいろな体験をさせてもらって、とてもいい経験になりました。</li> <li>(2) 島の学校ではそれほどできることはないという偏見がありました。他の所のほうが楽しいかもしれないと思いがちでした。大三島分校に来て、島だからというマイナスのイメージはありません。島の大三島分校でもとても楽しくなりました。</li> <li>(3) ここに入学する前は地域活性化等のいろいろな活動をしていることは全く知りませんでした。進路はこの高校に決めていました。</li> <li>(4) 入学前は分校に対してあまり関心はありませんでした。廃校の危機にあることは聞いていました。小学校のときにも一回、廃校の話は出ました。また廃校になりそうぐらいの感覚で捉えていました。自分が入学するときに卒業はできるので大丈夫ぐらいの感覚でした。</li> <li>(5) 先生から活動をしてみませんかという誘いが来るまでは、聞かされていたかもしれませんが、そのような活動をしていることについてはあまり覚えていません。あまり関心はありませんでした。</li> </ol>
理論的メモ	高校の存続と島の存続に取り組む高校であるが、生徒の一部はそれらには関心のない状態で入学する。進学に際して進路意識が不明確であったのではなくて、他の目的をもっていた場合もある。
概念2	関心有り
定義	入学する高校の統廃合の危機や高校魅力化の取り組みをあらかじめ関心をもっている。
バリエーション	<ol style="list-style-type: none"> <li>(6) 入学前はこの学校が外部に対して自分の学校や地域のことを発信していることを知って来ました。</li> <li>(7) 二つ離れた姉が大三島分校に入学したときから、ずっと大三島分校に来たほうがいいという感じでした。それをきっかけにどんどんと大三島分校のことを知りたくくなって、教えてもらいました。そして、大三島分校はこれだけ地域に貢献していて、愛されていることが分かりました。</li> </ol>
理論的メモ	インタビューデータ(7)からは近い関係の者が当該高校生徒である場合はあらかじめ関心や十分な知識を持っていたことが分かる。

概念が生成された。カテゴリーそのものはステレオタイプな感じがするが、概念については、前者では入学する高校であるにも関わらず、統廃合の危機や高校魅力化の取り組みに関心を払っていない。高校や地域の存続・衰退が関心外となっている。後者では統廃合の危機や高校魅力化の取り組みをあらかじめ関心をもっている。

○カテゴリー B「中学時代の関係の作り方」

中学時代の人間関係の作り方についてのカテゴリーである。「端にいる」の概念1つが生成されている。中学時代は対人関係や集団行動において積極的ではなかったという認識を持っている。人前で話すことが苦手だったという言葉は頻回あらわれている。

○カテゴリー C「関係をつくる」

カテゴリー Cは「関係をつくる」であり、「関係の作り方の体得」と「垣根崩し」の2つの概念から構成されている。前者の概念はアイデアを出し合う能力や全員参加するなどのコミュニケーションにかかわる能力であり、将来の、定住人口としてあるいは関係人口としての社会関係資本形成の能力を体験的に身につける。後者は、活動の中で出身地や学年の垣根を越えた社会関係作りを体得している。

○カテゴリー D「社会的覚醒」

カテゴリー Dは社会的覚醒であり、「役割行動」と「発信力克服」の2つの概念が生成された。前者は高校生活の中で活動の場が用意されており、役割を期待されていることや、役割をとることの当事者意識に覚醒する。役割遂行の緊張感を楽しく感じることもある。後者も役割に関わる概念であり、また、後述の「成長感」の概念にも関わる。だが、生徒にとっては人前で話すということが自

表2 カテゴリー B 中学時代の関係の作り方

概念3	端（はし）にいる
定義	対人関係や集団行動において、積極性、主体性が低い。
バリエーション	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 中学校のときは人前で話すことは苦手でした。するように言われるとしますが、それほど好んではしないぐらいです。</li> <li>(2) 人前で話すように言われると話しますが、そこまでは出たくないぐらいです。積極的に前に出るとはしませんでした。このようなことは向いていないと考えがちで、前に出るとはほとんどありませんでした。</li> <li>(3) 私も中学校のときは、別に仲が悪いわけではありませんが、クラスの中っていると特定の子と固まったりすることがあると思います。</li> <li>(4) その子たちと端のほうにいる感じのタイプでしたが、比較的に話せるといえば話せます。</li> <li>(5) 私は、昔から前に出るのがあんまり好きではありませんでした。高校に入って、せんたん部とまた別に生徒会に入ったのが、せんたん部に入るきっかけになりました。私も最初は別のクラブなどに入ろうと考えていましたが、先生から入らないかと言われました。</li> <li>(6) (中学では)人前で話すことがありませんでした。そのような場面がありませんでした。逆に聞く側です。</li> <li>(7) 中学校はマンモス校にいたので、自分の個性を出すことや自分がしたいことをすることができないといいますが、やりづらかったです。周りの意見に流されることも多くて、それが嫌だったので小さい高校に行きたいと、三崎高校に来ました。</li> </ol>
理論的メモ	中学時代は人前にでない、個性を出せない生徒であった。対人関係構築の経験が乏しく、対人関係の自己評価が低く、「端にいる」アイデンティティを形成していた。生徒の積極性や主体性は「人前に出る」ことをめぐって語られている。

表3 カテゴリーC 関係をつくる

概念4	関係の作り方の体得
定義	社会関係資本形成の能力を体験的に身につける
バリエーション	<p>(1) 高校生たちの企画ですが、夕涼み会も私たちが企画していろいろとしています。そのようなところではいろいろなアイデアを出して、それはいいです、もう少しこのようにしたほうがいいですというように、皆が積極的に話し合ってイベントをつくり上げました。</p> <p>(2) コミュニケーション能力もとても上がったと思います。イベント等に行くと、知らない人ばかりです。そこのワークショップでいかにして自分の意見を相手に伝えるか、そしてチーム内で雰囲気づくりをする上でコミュニケーション能力は必要なので、そこはとても上がりました。</p> <p>(3) 私のグループで今までしてきた感じは、皆でたくさんの案を出します。本当に全員参加のような感じです。誰かがしゃべっていないことがあまりありません。皆でしょうという感じです。</p> <p>(4) (自分からの働き掛けは) 距離が近いので、あの子に言ったらしてくれそう……などが、見て分かるようになりました。それで同じ学年の人にも話し掛けられるようにもなったし、変わりました。</p>
理論的メモ	生徒はグループでの活動やイベントの中で、他者との関係を構築する方法を体得していく。社会関係資本の観点からは、高校魅力化の活動を通して、社会関係（ネットワーク）が形成されるだけでなく、社会関係資本の作り方が体得されている。
概念5	垣根崩し
定義	生徒たちは出身地の壁、上下関係の壁を越境して社会関係をつくる能力を体得する。
バリエーション	<p>(5) (友達が成長したと感じる場面は) せんたん部に入ってくれた子もいて、1年の頃の印象と3年間、高校生をしてきて、私は他から来た子の成長を見るほうがすごく大きかったです。</p> <p>(6) (友達が成長したと感じる場面は) 他から来た人にA町の話をしてしまうと他の子に疎外感といえますか。A町ではないから分からないと友達から直接、言われたこともあります。「A町じゃないけん、その話、ちょっと分からんな」と言われて……。その子は、A町に来てからは地域おこしの活動に積極的になって、1年生の頃は人前で話すことがあんまり得意そうではありませんでしたが、いざ人前に出てみるとすごくしゃべるのが上手でした。</p> <p>(7) 住んでみると、今でも分からない所はいっぱいありますが、人数が少ないのでみんながずっと同じクラスです。同級生も2年生は24人しかいなくて3年間、ずっと一緒のメンバーなので距離が近くなって、出身もどうでもよくなります。</p> <p>(8) 私が1年の頃は、3年生に話し掛けるのはすごいびくびくしていました。他の先生に聞きましたが、3年生が1年生の教室に入ることや1年生が3年の教室に来ることは普通の学校ではないと言われて、私たちからしたらそれが普通です。逆になんで、それがないのか。自分たちからは分からないですが、他から見たら学年の差がないぐらい生徒同士の仲がいいです。</p> <p>(9) 後輩が先輩に何とか先輩と呼ばないことに最初はびっくりしました。3年生に向かっても何々さんや、下の名前と呼んでいて、それが新鮮でびっくりして、おろおろしました。それが普通に教室にも普通に同級生かのように先輩がいて、最初はすごいびっくりしました。怖かったわけではないですが驚きはありました。それはみんなが仲のいい証拠で、それを見てこの高校を選んで良かったと感じました。</p>
理論的メモ	高校魅力化に取り組む高校の多くは、町外生や県外生の募集を行う。それらの生徒と町内生の両者は垣根を越えて関係を結ぶ。さらに、高校魅力化に取り組む高校は小規模校であることが多く、学年を越えて異学年間の生徒＝生徒関係を形成する

分を克服するという特別の意味を持ち、人前で発言することに関する成長物語が多く語られた。

### ○カテゴリーE「楽しさ」

最後のカテゴリーは「楽しさの」カテゴリーである。「成長感」と「没頭」の2つの概念が生成されている。前者は文字通り、自分の行動力が成長することから来る楽しさである。後者は使命感、達成感、貢献感とは異なる動機付けが働いていた。フロー（没頭）の感覚が高校生の楽しさとなっている。



表4 カテゴリーD 覚醒

概念6	役割行動
定義	他者から期待されていることや必要とされていることへの気づきが、役割行動や使命感を生む
バリエーション	<p>(1) 自分から進んで話し掛けなければ全く伝わらないです。それが大変だと思いました。</p> <p>(2) そのように前に出ることは、今まではほとんどありませんでしたが、大勢の前で話すことを高校生になって初めてに近い感じでした。最初は本当に不安や緊張ばかりでしたが、3年になって、それがほとんどなくなりました。</p> <p>(3) 例えば周りから押し付けられるではありませんが、してほしいという感じになって私がしますかとなりましたが、私がしなければ他の人が困るかもしれないという感じでした。</p> <p>(4) この高校は自分がしなければ誰もしてくれないことがたくさんあって、それが自分から積極的にいくことになるので、自分が誰かを待つのではなく自分で前に出ていけるようになったのが一番、成長したところです。</p> <p>(5) せんたん部のときはみんなが円や、机をくっ付けて話をしているので、そのようなこと（緊張すること）はないです。せんたん部の活動報告がたまにあって、そのときは緊張をします。</p> <p>(6) (せんたん部ではむちゃ振り)はたまにあります。逆にスリルがあって楽しいです。</p> <p>(7) (自分の強みや得意な分野) 私は、はっきりと地域のことに気が付くかは分かりませんが、普段の生活レベルで、下を向いて歩くことが多いです。直接は関係がないかもしれませんが、人と見るところがずれているといえますか、考えるところが本当にずれています。人が気付かないことや、そのようなことを考えるのが好きです。独特性があります。</p> <p>(8) 僕は運動が全く駄目で、運動はもてるだろうとの気持ちはありましたが、高校時代には運動を諦めることにしました。自分が輝く場所は、頭を使う場所しかありません。</p>
理論的メモ	生徒が人前に出る（生徒が変わる）必然が言及されていた。それは、役割意識であり、使命感であった。伝えたいことの存在が役割となっている様子が述べられていた。ただし、活動の中のむちゃぶりについてスリルがあって楽しいと述べており、生徒を自由にする信頼や受容の人間関係が基盤となっているものと推測される。
概念7	発信力克服
定義	高校生は、取り組みの中で自分に発言やプレゼンテーションの能力があることに覚醒する
バリエーション	<p>(9) プレゼンテーションをしていくうちに、自分がどんどんプレゼンテーションをすることがうまくなっているのを感じることができました。</p> <p>(10) 回数を重ねるたびに、ここは言わなくてもいいかもしれないというように、自分で省いていきました。</p> <p>(11) アドリブは絶対にできない気がすると思って、ずっとプレゼンテーションのせりふを見ながら、原稿を読むことになりました。私はアドリブがうまありません。でも、してみると自分が思っていた以上にできました。</p> <p>(12) そのように自分で言うところを選別して、相手にどれだけ伝えるのかを考えることができました。回数を重ねるごとに、自分のプレゼンテーションがうまくなっているのを感じることができました。</p> <p>(13) (伝えたいのは) とにかくこの高校に来て全力で楽しめることです。あとは別の学校に全く負けないぐらいにいろいろな行事もあります。自分が変わることができる場所でもあると思います。それをどれぐらい伝えることができるかについて伝えました。</p> <p>(14) 私はとても表情に出るタイプです。自分が楽しいことを伝えると、笑顔になります。それで聞いてくれる人もとても笑顔になることや、楽しそうということを常に感じてもらうことができ、そこがうれしかったのでよかったです。</p> <p>(15) 地域みらい留学（のイベント）で遠くから来る価値はあって、とても楽しいということを伝えればいいと思いつながらプレゼンテーションをしました。</p> <p>(16) 活動してみたくさん出る機会が増えたので、人前で話す力や緊張をしなくなった面では、自分は成長ができました。</p> <p>(17) せんたん部に入って、自分も前に出てもいいとの気持ちになって、自分がしたいことを言葉にして言うことや、自分の意見を今までよりも言えるようになりました。人前に出るのは今でも緊張しますが、少しずつ人前で話すのが好きになれました。</p>
理論的メモ	「役割取得」によって、誰かから、教えられるのではなく、自分で発信の工夫をする。そして発言やプレゼンテーションを繰り返す中で、あるとき、発信力のある自分や積極的な自分に気づく。生徒インタビューからは、習ったのではなくて、色々工夫する過程で、自分の内なる発信力に目覚めたことが示唆されている。

表5 カテゴリー E 楽しさ

概念 8	成長感
定義	行動力を高め、行動力を高めたという実感をもつに至る。
バリエーション	<p>(1) いろいろな人と打ち合わせのようなことをしていくうちに、とても何でもできるような気がしてきました。失敗を恐れずにどんどんと行っていく行動力が、そこで少し身に付いたと思います。</p> <p>(2) 皆がイベントに興味を持って、どのようなことをするか、このようなことをします、そのようなことをしますかというように、興味の輪が広がっていきます。皆も興味を持って、楽しく行っています。</p> <p>(3) イベントでいかにたくさんの人に参加してもらえるかについては、苦労をしました。</p> <p>(4) 自分がこの学校に来る前は、自分から誰かに何かを伝えるようなことがとても苦手で、本当に全く駄目でした。いろいろな活動に参加してから、呼び込み等の活動をして、自分が取り組まなければ駄目だという責任感が出てきました。それで取り組んでみると、意外といける感じで、自分のできることが広がった感じになったことです。</p> <p>(5) 自分たちの中の思いもどんどんと増えていって、それがうれしいです。ああいうことがあったといっても1年生の一番初めはなかったですが、2年生に上がってからは、ああいうことがあったと話す回数が増えて、私はそのような経験できるのはすごく楽しいし、みんなと長い時間をいっぱいいたことが実感できます。</p>
理論的メモ	生徒はグループでの活動やイベントという OJT で、行動力を高め、行動力を高めたという実感をもつに至る。
概念 9	没頭
定義	使命感、達成感、貢献感とは異なる動機付けが働いていた。フローの感覚が高校生の高校魅力化の取り組みへの動機を高めている。
バリエーション	<p>(6) 私は VYS 部といわれるボランティアをする活動に入っていて、そこでイベントに参加をするなどのお手伝いをする係として、裏方がすごく楽しいと感じました。せんたんでも、そのような地域のイベント企画などの活動ができるだろうと入りました。</p> <p>(7) 去年の先輩たちはすごい人で、いろいろとやばいといえますか。いろいろな方面にたけている人ばかりで、学校のトップが集まったようなグループでした。それで入りづらいと感じましたが、入ってみたらそうでもなくて、みんなが普通の人でした。どちらかといえば変わっているところもありますが、今は楽しいからいいです。</p> <p>(8) せんたん部の活動がどんどんと大きくなって、続けていけばもっと大きくなるのではないかとのこと、せんたん部で活動をしています。</p> <p>(9) せんたんミーティングは、地域の人にも見学してもらえるイベントですが、集客があんまりよくありません。原因は広告を出すのが遅かったのが一番にあって、広告をもっと出していたらもっと人が来てくれたらろうとの反省があります。本年度もせんたんミーティングを開催するので、それは広告を早く打てばもっと人が来てくれるのではないかと改善点が見える失敗だったので、悪い失敗ではありませんでした。</p> <p>(10) 2 年生の頃はずっと体操をしていましたが、その中でせんたん部の活動を見ていて、せんたん部のような活動のほうをしたい気持ちが大きくなりました。</p>
理論的メモ	ロジェ・カイヨワ (Roger Caillois) (1958 = 1971) の遊びの楽しさの感覚よりも、ミハイ・チクセントミハイ (Mihaly Csikszentmihalyi, 1934 年 9 月 29 日 -) のフロー (Flow) の感覚 (ゾーン、ピークエクスペリエンス、無我の境地、忘我状態) に該当するような遊びが展開されている。高校生は、頻繁に活動そのものの楽しさに言及するが、貢献感や町民や仲間との繋がりや一体感の楽しさではない。社会的評価・関心の調達の結果でもない。動機付け理論の観点からは自己有能感でもない。内発的動機付けに近い概念かもしれない。

## 6. まとめ

本稿は、「地域の特色を生かした教育」を学ぶ生徒の目線から、学習効果を検討した。M-GTAによって生徒データを分析したところ、5つのカテゴリーと9つの概念が生成された。【A. 事前の関心】(概念1「関心無し」、概念2「関心有り」)、【B. 中学時代の関係の作り方】(概念3「端(はし)にいる」)、【C. 関係をつくる】(概念4「関係の作り方の体得」、概念5「垣根崩し」)、【D. 覚醒】(概念6「役割取得」、概念7「発信力克服」)、【E. 楽しさ】(概念8「成長感」、概念9「没頭」)である。

入学前には高校の取り組みへの関心が不十分であったり、性格面で積極的でなかった生徒が、地域の特色を生かした教育を通して、人間関係の垣根を克服したり社会関係を形成したりといった体験をする。このことは生徒自身の人間関係に関わる課題の克服と成長でもある。さらに、役割行動が取れるようになったり、生徒自身の発信力にかかわる課題を克服したりする。そして、授業を通して、成長感に由来する楽しみや没頭する楽しみを得ていることが析出された。

生徒にとっては地域の特色を生かした教育を学ぶことは、成長と克服の物語をつむぐことであり、楽しみでもあることが学習の効果のリアリティとして析出された。「地域の特色を生かした教育」の学習効果のリアリティは、本稿の冒頭に見た4つの潮流が提起する資源としての地域の活用や高校を核とした地域活性化といった側面とは異なるリアリティである。また、統廃合回避や地域の活性化の側面とも異なるリアリティである。

本研究は冒頭で述べたように、4つの潮流から演繹される学習目的と生徒の実際の学習効果の整合性や齟齬を考察することを使命としている。いうまでもなく高校は社会的な制度であるので、高校は社会からの要請を自分自身の組織目標にする。しかし、こうした4つの潮流から導き出された教育目標を組織目標とすることを要請される魅力化の高校では、生徒のリアリティにおいては克服と成長が学習効果であると認識されていた。学習目標の設定に際して、生徒個人の成長や克服、楽しさといった生徒のリアリティに配慮した目標設定が重要であることは、学習の目標と効果の祖語を生じさせないためには忘れてはならない。こうしたリアリティを魅力化の教育目標として検討する必要性が生じているといえる。なお、本稿の分析結果に関して、分析が、活動のやりがいと自分が活動に参加して得たと思うことを主な対象としたことの影響については慎重に考慮すべきである。今後の課題としたい。

## 付記

本稿で扱ったデータや高校に関する紹介はリポジトリ等で後日公開する予定である（『地域人材育成研究』（近刊）。JSPS 科研費 JP19K13889, 2018 年度前川財団 家庭・地域教育助成の助成を受けた。執筆にあたり地域人材育成研究会のメンバーらとの議論から示唆を得た。査読の労をとっていただいた匿名の先生に感謝します。最後に調査に協力していただいた対象校、対象者に深謝いたします。

## 参考・引用文献

- Caillois, R., 1958, *Les jeux et les hommes : le masque et le vertige* (4e éd.). Gallimard. (多田道太郎・塚崎幹夫訳, 1971, 『遊びと人間 (増補改訂版)』講談社.)
- Csikszentmihalyi, M., 1975, *Beyond Boredom and Anxiety*. The Jossey-Bass behavioral science series. Jossey-Bass Publishers. (今村浩明訳, 1991, 『楽しむということ』思索社.)
- 藤岡慎二, 2016, 「辺境で進む教育改革: 高校魅力化プロジェクトと地域課題発見解決型キャリア教育による学習意欲と学力向上, 高大接続改革への取り組み」下町壽男・浦崎太郎・藤岡慎二・荒瀬克己・安彦忠彦・溝上慎一『アクティブラーニング実践Ⅱ』産業能率大学出版部.
- 樋田大二郎, 2019, 「高校魅力化の可能性: 他山の石として魅力化の魅力と力を考える」『月刊高校教育』2019 年

8月号：28-31.

- 樋田大二郎・樋田有一郎, 2018, 『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト：地域人材育成の教育社会学』明石書店.
- 樋田有一郎, 2014, 「町存続の生命線としての高校存続。町活性化の最前線としの高校活性化」『青少年問題』青少年問題研究会, (660)：42-47.
- 樋田有一郎「せんたん部 生徒インタビュー報告（特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 愛媛県立三崎高等学校）」『地域人材育成研究』地域人材育成研究会, (1). (近刊)
- 樋田有一郎「生徒インタビュー（特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 愛媛県立今治北高等学校大三島分校）」『地域人材育成研究』地域人材育成研究会, (2). (近刊)
- 木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』弘文堂.
- 木下康仁, 2007, 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析技法」『富山大学看護学会誌』6 (2), 1-10.
- 三沢徳枝, 2018, 「学習支援に参加した中高生の変容プロセスに関する探索的検討：M-GTAの分析を通して」『教育学部論集=Journal of the Faculty of Education』(29)：1-19.
- 文部科学省, 2018, 「地域との協働による高等学校改革の推進について（通知）」(30 文科初第 483 号平成 30 年 8 月 20 日)
- 大橋隆広, 2017, 「『チーム学校』論の系譜：1990 年代以降の学校論を中心に」『広島女学院大学人間生活学部紀要』(4)：81-86.
- 奥貫麻紀, 2015, 「産学・地域社会連携による課題解決型学習における学習成果：定性的分析による一考察」『関西大学高等教育研究』(6)：31-44.
- 鳥根県教育委員会, 2019, 「県立高校魅力化ビジョン（2019 年 2 月）」.
- 浦崎太郎, 2019, 「本格化する高校の地域連携：『地域との協働による高校改革推進事業』を中心に」『月刊高校教育』2019 年 8 月号：32-35.

**ABSTRACT**

**The Educational Reform Based on Strengths  
and Characteristics of Each Region:  
Discrepancies between the Reality of Students' Learning and Preplanned  
Educational Objects under the MIRYOKUKA Educational Reform,  
“The Project for Attractiveness of Schools” in Japan**

**Yuichiro HIDA**

This paper explains the ongoing educational reform in Japan called MIRYOKUKA; the project that is run by national and each local government to make high schools more attractive by utilizing the strengths and characteristics of each region. The paper analyzes the learning objects and effects of the school by interviewing high-school students. The first part of the paper explains how the reform is influenced by the result of four ongoing educational issues in Japan: The Ministry of Education's recent educational reform on a high school, the concept of “School as a Team”, a social movement against the abolition of schools in depopulated areas, and increasing interests in school's roles in the revitalization of a region. In the latter part, this paper analyzes what and how students learn in different ways than MIRYOKUKA educational reform aimed at first. By analyzing interview data of students by the method of M-GTA, this research found that although the aims of education under MIRYOKUKA project is to help students learn how to revitalize a region and acquire problem solving skills by using regional resources, students also encourage their self-development as well as overcome the experience of past failures in their early life. Moreover, they seem to enjoy the experience of flow (Csikszentmihalyi). The result of the paper provides the insight that the ongoing educational reform should be carried out with concerns on how the aims of education differ from the reality of students' learning objects.

**Key words:** the project for attractiveness of schools, MIRYOKUKA, educational reform, high school, M-GTA